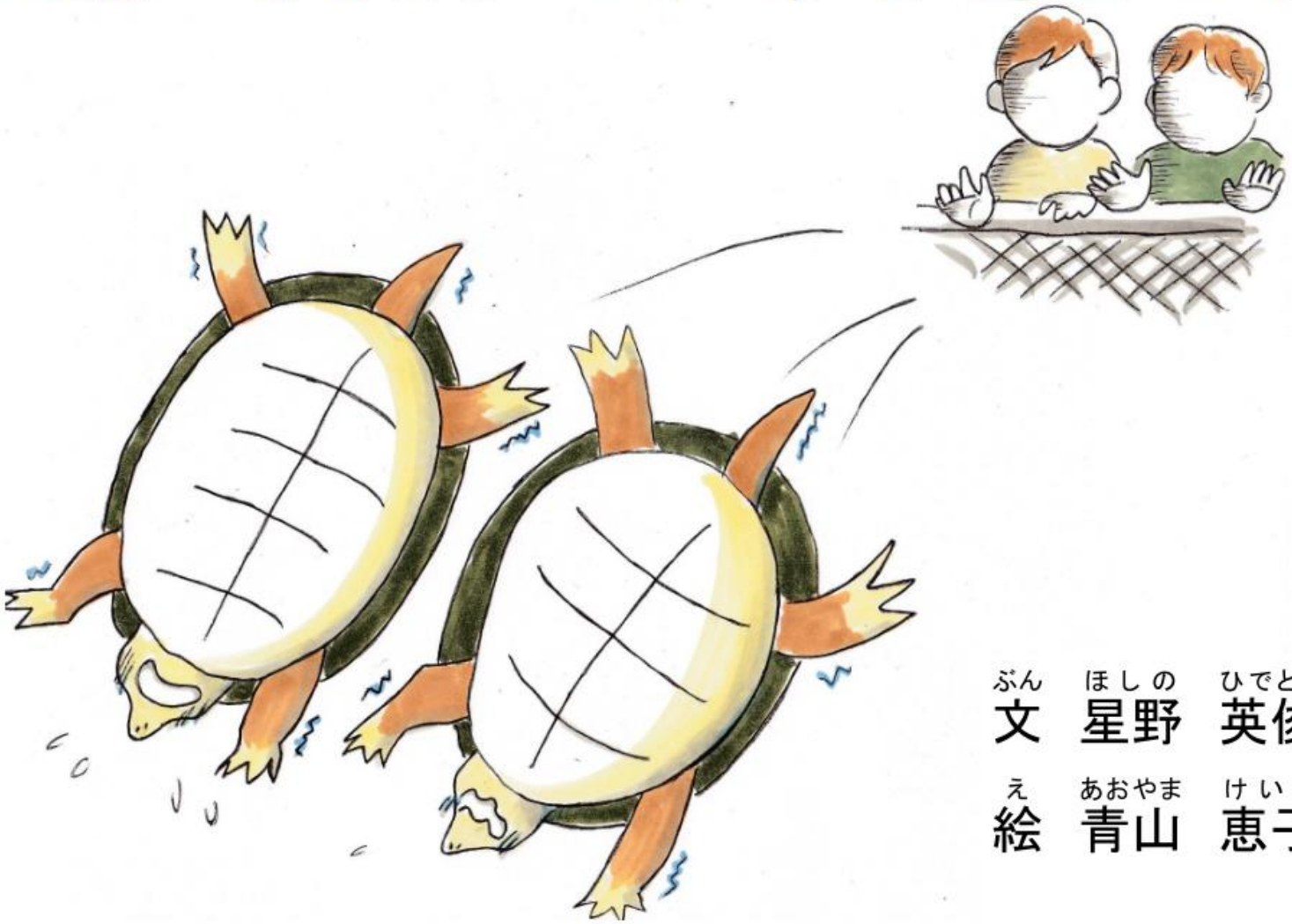
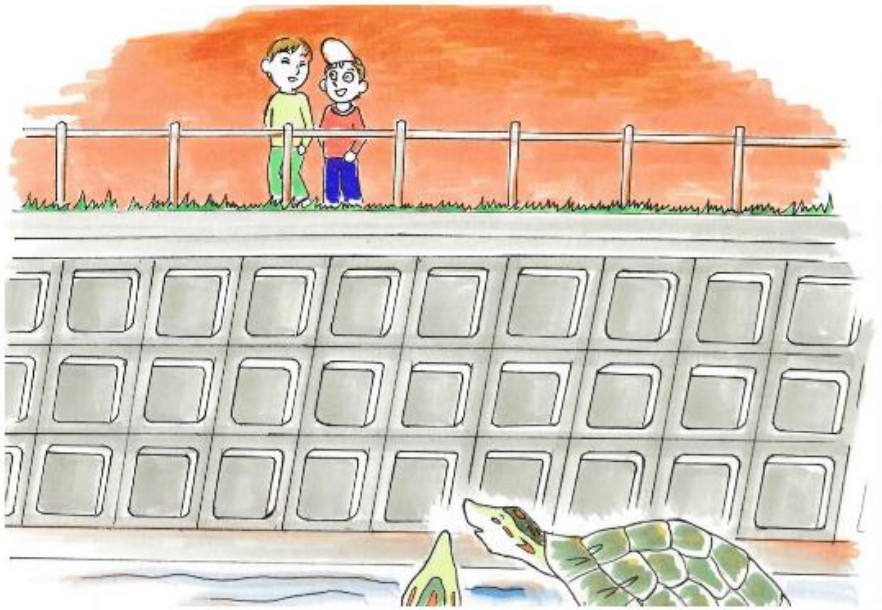
ミドリガメのライとハク

ミドリガメのライとハク



文　星野　英俊
絵　青山　恵子

クリスマスが近いある日の夕方です。
ここは、大都会のかたすみにある小さな町の中を流れる小さな川です。
川の中にある岩の上で、二ひきのミドリガメが、
川べりのサイクリングロードの方をじっと見つめていました。



サイクリングロードを兄弟らしき二人の少年が歩いています。
ライとハクという名の二匹のミドリガメが話を始めました。

「にているなぁ。なぁ、ハク」
「あぁ、とってもにているね。兄さん」
「おれたちに、じゃないぞ」
「わかっているよ。ぼくたちをそだててくれた兄弟にだろう？」
「そうそう。あの兄弟はもう高校生ぐらいになっているだろうな」
「うん」

「あの兄弟との出会いは縁日だったよなぁ」
「そうだったよね。カメすくいの屋台だよ、兄さん」
「あの時たまたま、おれとおまえがあの兄弟にすくわれたんだ。
　もともと、おれたちは兄弟でも何でもない」
「兄さん、そんなさびしいこと言わないでよ。
　ぼくたち兄弟としてそだてられたんじゃないか」
「あぁ、そうだな、ライとハクって名前をつけてもらってな」
「とってもかわいがってくれたよ」

「ハク、あの兄弟はおれたちの水そうをいつもきれいにあらってくれたよな」
「そうそう、だからいつも気持ちよくすごせたね。兄さん」
「えさをわすれず食べさせてくれたし、
水そうから出して自由に歩いたりもさせてくれた」
「いつもぼくたちを見まもってくれたよね」
「二人ともいつもニコニコしていたなぁ」
「うん、とてもやさしい笑顔だったよ」

「兄弟だけじゃなく、
あのうちの家族全員がおれたちをだいじにしてくれた」
「そうだったね、兄さん」
「おれたちも家族の一員だと思った」
「そう、家族っていいなぁって感じた」
「ハク、おれたちもあのころは本当にしあわせだったなぁ」
「うん、本当にそうだね、兄さん」

「旅行にもいっしょにつれていってくれたよなぁ」
「そうそう、車にのせてもらってね」
「ハク、おまえはいつも車にゆられて、よっていたよな」
「そうだったよね。
でも、いろいろな場所を見ることができて、楽しかったよ」
「ホテルのへやにも家族といっしょにとまってね」
「うん、いい思い出がたくさんあるね」

「なぁハク、はじめて大きい海を見た時はビックリしたなぁ」
「そうそう、あの波っていうやつもこわかった」
「おれたち波がこわくて必死でにげようとしたよな」
「それを見て、あの兄弟は大笑いしていたなぁ」
「本当に楽しかったなぁ、あのころ」
「そうだね・・・・・兄さん」

夕やみがせまり、
川ぞいの家々にクリスマスイルミネーションのあかりがともりはじめました。
トナカイや星、クリスマスリースなどのイルミネーション、中には、
ロープをつたって家の窓からプレゼントをとどけようとしている
サンタクロースのイルミネーションなどもあります。
二ひきのミドリガメはしばらくの間だまって、
ぼんやりとイルミネーションをながめていました。

二ひきのミドリガメはまた話をはじめました。

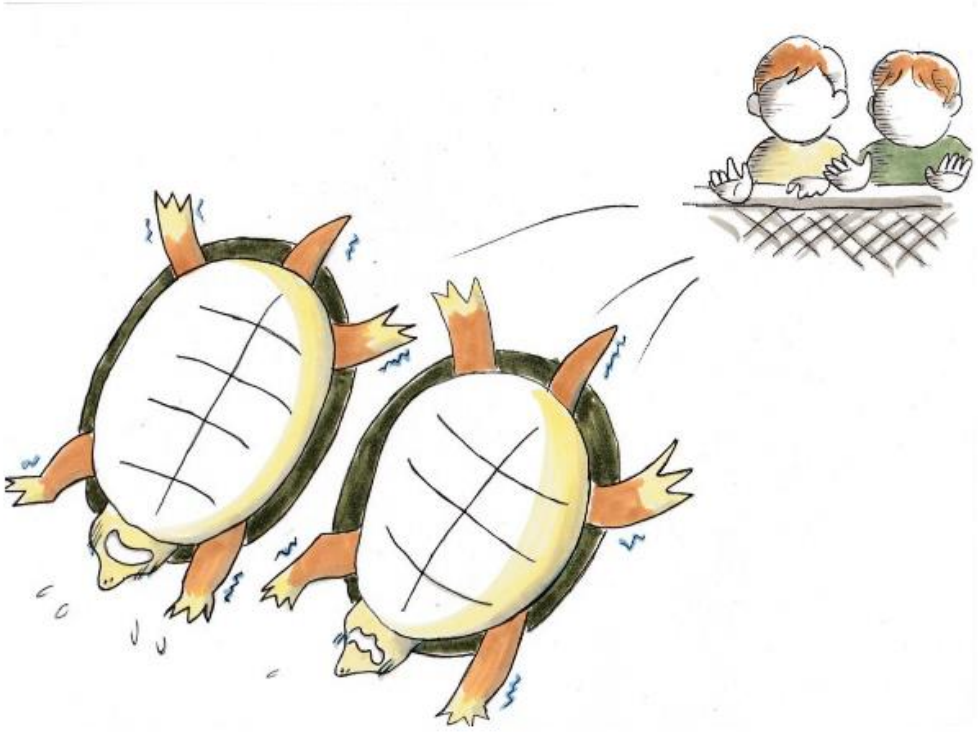
「なぁハク、クリスマスにはとり肉をごちそうしてくれたなぁ」

「あぁ、あれはすごくおいしかったね、兄さん」

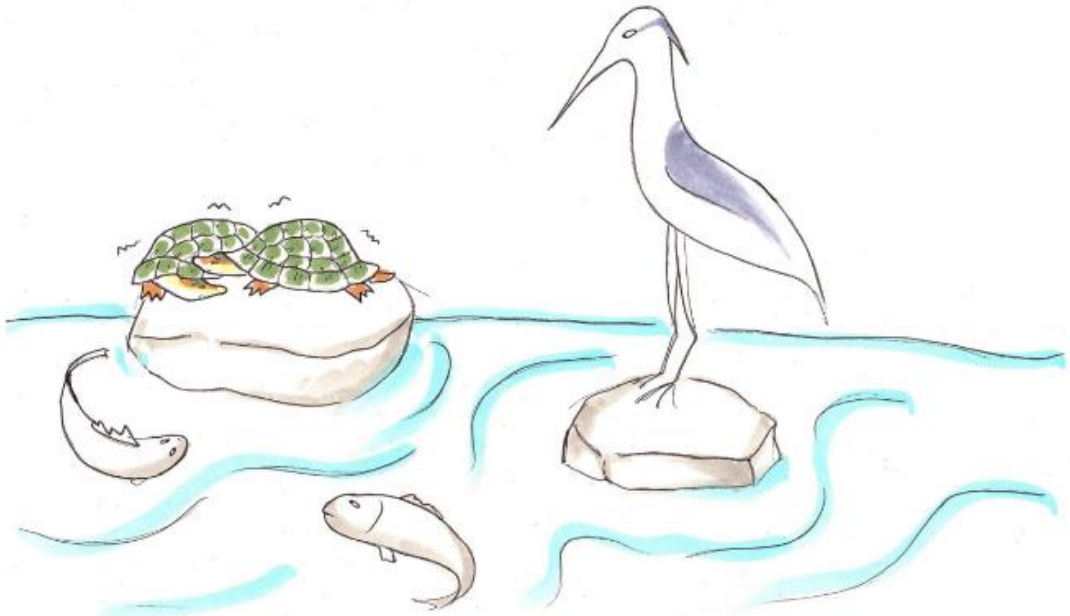
「あの時も、本当に家族っていいなって思ったよ」

「ぼくは、この家族のしあわせがいつまでもつづくようにって、
いつもねがっていたよ」

「でも、あの家族が川ぞいのマンションから、
家を買って引っ越すことになった」
「そうしたら、ぼくたちはいらなくなったんだね」
「本当にそうなのかな？あんなにかわいがってくれたのに、
なぜいっしょにつれていってくれなかったのだろう？」
「わからないけれど、とにかく、あの家族は、
ぼくたちがじゃまになったんだよ」



「そして、おれたちはこの川になげすてられたんだ」
「あの時はこわかったね、兄さん」
「あの兄弟は、なんであんなことをしたんだろう？」
「あの時、ごめんねとは言っていたけどね」
「ごめんねなんて言われたって、ぜったいにゆるせないよ！」
「あの時は本当にこわかったし、かなしかった・・・」



「それから、おれたち、この川で最初はいじめられたよな」
「まだからだが小さかったしね。それに、よそ者だったから、
なかまはずれにされたよね」
「こんなきたなくてちっぽけな川にすてられて、
おまけにいじめられるなんて最低だよ！」
「川にすてられてしばらく、ぼくは、
しあわせだったころを思い出して、毎日泣いてばかりいたよ」

「でも、そのうちぐんぐんからだが大きくなって、
ほかの生き物たちから、ぎゃくにこわがられるようになった」
「ぼくたち生きていくためには、ほかの生き物を食べなくちゃならないから、
どうしてもうらまれるし・・・」
「今おれたちはこの川で一番のきらわれものだろう」
「それは、兄さんがいつも大きな声でおどかしたりするからだよ」

「なぁハク、おれたち人間に飼われていたころの方が
本当にしあわせだったのかな？」

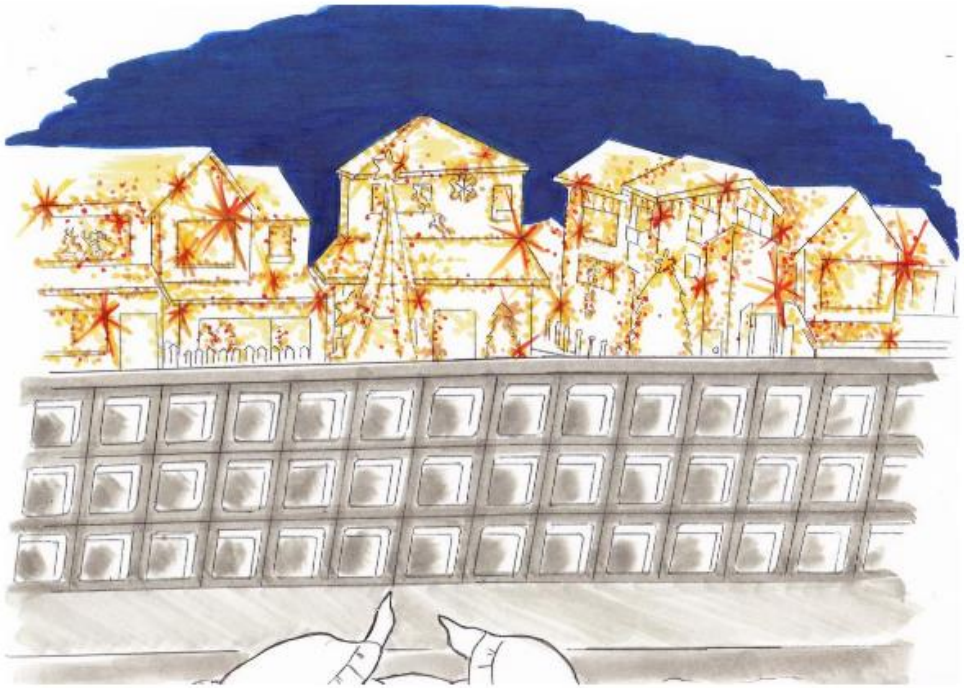
「どういうことだい？兄さん」

「つまり、エサをもらうのではなく、今のように自分でさがして食べる方が、
カメにとっては自然だろう？」

「うん、今はどこへでも自由に行かれるしね」

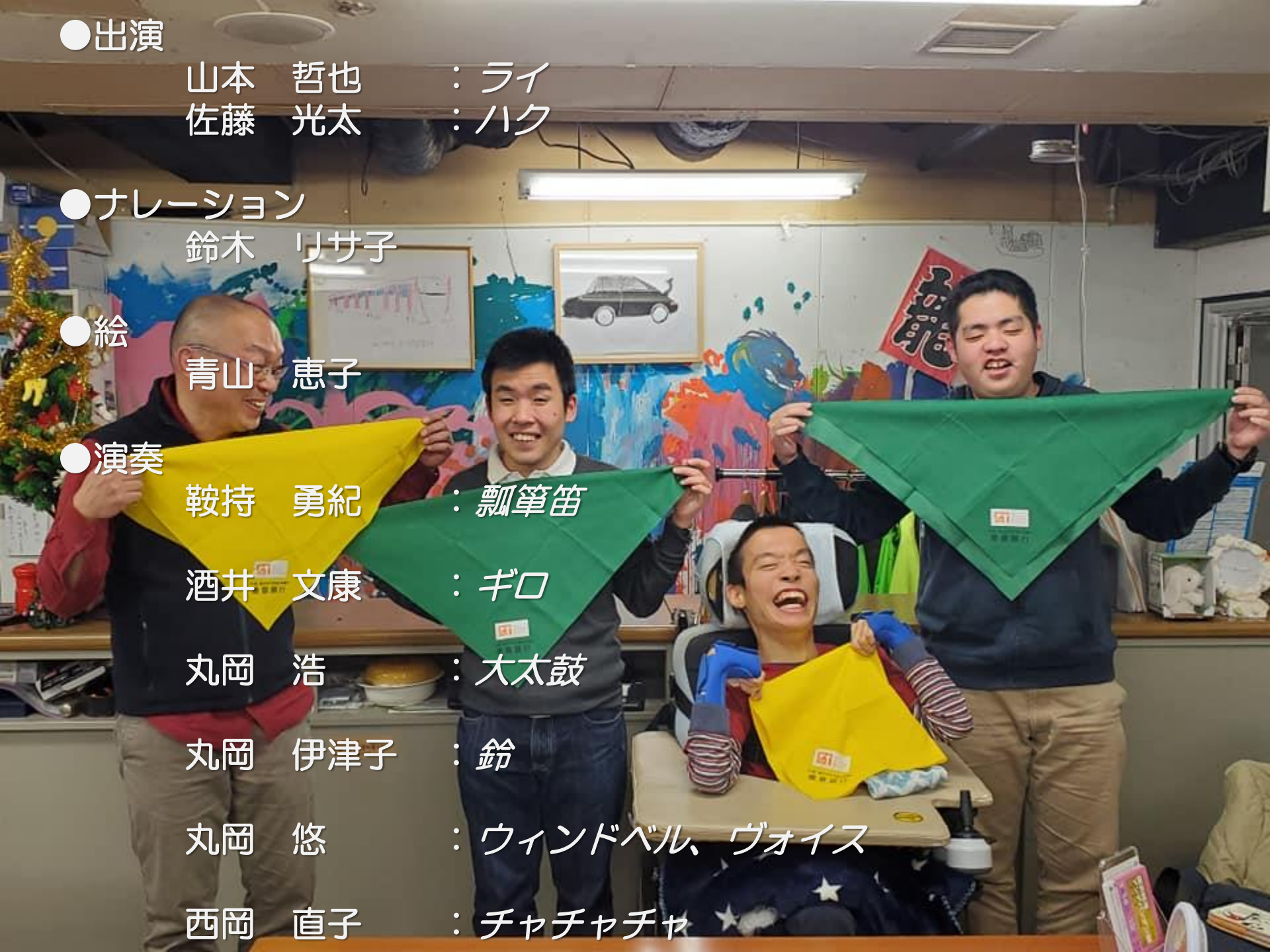
「でも、ここで生きていて楽しくはない」

「そうなんだ。
ここは、ぼくたちが生きていく本当の場所じゃない気がするんだよね。
兄さん」



「なぁハク、人間ってふしぎだよね」
「どういうことだい？ 兄さん」
「あんなにきれいなものを作ることができるのに、
とってもざんこくなところがあるんだよ」
「そうだね、人間って、本当にわからないよね」

二ひきのミドリガメは、家々の美しいイルミネーションを、
いつまでもぼんやりとながめつづけていました



●出演

山本　哲也　：ライ
佐藤　光太　：ハク

●ナレーション

鈴木　リサ子

●絵

青山　恵子

●演奏

鞍持　勇紀　：瓢箪笛

酒井　文康　：ギロ

丸岡　浩　：大太鼓

丸岡　伊津子　：鈴

丸岡　悠　：ウィンドベル、ヴォイス

西岡　直子　：チャチャチャ